

第一節 『禪策問答』

一、問題の所在

北京からいくつかの新出の敦煌仏教文献が発表されたうち、そこに含まれる『禪策問答』〔藏外1 p.45-52〕は、禪宗の様々な教理的課題について経証を用いつつ闡明するもので、内容から推して比較的初期の禪宗文献のスタイルを持つものである。そしてその内容は単に宗派的特性を示すと言うよりも、各学派が旺盛な教学研究を行なう風潮の中にあつてそれらの方法を共有しつつそこから単独の宗派に特色化して行く、そうした契機を示しているように思える。

過日公刊された『藏外仏教文献』にはその翻刻と注記が付されているが写真掲載されておらず、紙質寸法などのデータも記されてはいない。それ故、本文のみならず、その書体、紙面構成、接続状態などの詳細は知り得ず、隔靴搔痒の思いでいたのだが、幸い北京を訪れる機会を得てそれを見ることができた。

ここでは改めて翻刻したテキストの読解を試み、そこに含まれる禪宗史の教理的課題について考察を加えてみたい。

二、テキストについて

北京新本一二五四号と名づけられたこの新出資料は三篇の禪籍の連写からなっている。三篇とは、最初が『達摩禪師論』、二番目が『禪策問答』、そして最後が『息諍論』である。一見して従来見慣れた敦煌文献とは印象が異なることに注意しなければならない。

単なる印象批評は避けねばならないのだが、まずその真偽が充分吟味されなければならないだろう。勿論、偽撰であったとしても、ペリオ本との校合が出来るのであるから内容にまで関わるものとは考え難い。蓋然性の高い見方のひとつとしては北京図書館本敦煌文献が整理される段階で新たに書写されたものではないか、ということのだが現段階では憶測に過ぎない。

さて、本文の概要を記すならば、まず『達摩禪論』は首欠で本文献における正規の名前は知られないが、これまでペリオ二〇三九号が知られ、それとの校合が可能である。また同じ名前をもつテキストに薬師寺橋本凝胤蔵の敦煌本があり、関口真大によって研究と翻刻が公開されている〔関口大師 pp.49-81, pp.463-468〕。但しこれは同名ではあるが内容は別のものである。題名と内容の混雑は敦煌文献の特色のひとつでもある。また同じくペリオ三〇一八号に、『菩提達摩論』なる表題のテキストがあるが、内容は『二入四行論』の一部でやはり別のものである。いずれも「看心」や「撰心」の語が見え、盛んに経証を用いて教理の整理をしている点に共通項がある。このことから東山法門もしくは北宗時代に達摩の名を借りて作成された教理綱要書のひとつと推定される。なお、その後の研究経過については田中良昭氏の詳細な研究がある〔田中敦煌 p.193〕。

次に、『禪策問答』は首尾完結したテキストであるが著者名や製作年代などは記載されておらず、他に該当する異本も知られていない。後に見るように内容は同じく東山法門から北宗の時代の綱要書の形式を持つと考えてよいだろう。

最後の『息諍論』は後半に一部欠けた部分が見られるが、別に北京新本一二五五号があつて、それとの校合によってほぼ完全に復元できるといふ〔蔵外 I p.57〕。表題の下に「達摩禪師作」とあり、同じく達摩に仮託された教理綱要書である。テキストの後には更に問答が書写され、さらに五言詩、七言詩が記録され、尾欠で終っている。

一般にテキストの連写は敦煌文献には数多く見られ、そこには一貫した何らかの意図があると考えざるべきであるが、それがにわかには判断し難いものも珍しくない。そんな中でこの北京新本はその性格が比較的明瞭に見て取れるテキスト群を形成しているといつていいだろう(一)。

構成の上では、本論が二種の達摩論に挟まれていることの意味にはわかには知りたいが、前後の達摩論はいずれも東山法門系統の作品と考えられるから、本論も東山法門ないしは北宗の立場に立つと考えてよいだろう。

本文の問答における質問は三十項目からなり、その項目をあげれば次の如くである。

- (一) 禅は幾種の法門か有る。
- (二) 若為(いかん)が坐せん。
- (三) 若為が方便して安心せん。
- (四) 若為が看心し、心は何にか縁するや。
- (五) 既に所縁無ければ、大乘の意に合し、応に方便もて旨帰の処に会すや。
- (六) 若為が清浄を証得するや。
- (七) 既に絶思離想ならば、若為が行道せん。
- (八) 有心ならば即ち応に道に進む可きも、若し無心ならば、云何が知るを得るや。
- (九) 若為が喚びて禅と作す。(十) 何ぞ名づけて空と為すや。
- (十一) 何ぞ名づけて入禅となすや。
- (十二) 若為が坐禅すや。
- (十三) 何をか覚観と為すや。
- (十四) 定は覚知する所有りや。
- (十五) 既に知る所無ければ、能く楚毒割截を受けるや。
- (十六) 諸法は尽く空とは、空見に墮せざるや。
- (十七) 禅定以後に、更に思量すること有りや。
- (十八) 四威儀の中、何者か定を得るや。
- (十九) 応に山林の閑寂を樂うべきなるに、何意か村坊城郭、喧華の処に住す。豈に定を得る容けんや。
- (二十) 応に松を喰し柏を啖うべし。何に因りてか還た世人と相い似たるや。

- (二十一) 戒行精研にして、魔を去り障を離るに、何に因りてか病饒きや。
- (二十二) 応に糞掃の三衣を著すべきに、何意によりてか還た世人と衣裳の相い似たるや。
- (二十三) 能く罵辱と楚毒を受くるに、何意によりてか語を諧ぐも、面は参異すや。
- (二十四) 德行高明なるに、何すれぞ人に訶詰せらるや。誹謗を作すに、唯に對うる無きや。
- (二十五) 心は応に平等なるべきに、彼の意は自ら違えり。念定に勤めず、偏りを生ずるに到る耳なり。
- (二十六) 性行は柔和にして、言語は互いに下るに、何に因りてか精神を高強にし、雄猛に意を用いるや。
- (二十七) 処を課して即ち応に坐するを得る。何の意にてか房舎禅床に在るを要して、始めて法教を行ずるや。
- (二十八) 意は無生に会し、心は淨境に遊ぶ。何に因りてか空を出ずして有に入り、還た世間に住し、善悪を見るや。
- (二十九) 修道は応に須らく勤苦節身し、広く多聞を学すべきに、何の意にてか端然として直坐し、矇矓として思量する所無きや。
- (三十) 仏は定心悲嘆始憲門を示され、心意坦然たり。何の意にてか還つて經論有りて、乍ち惡み乍ち好み、是と道い非を説くや。
- 一見して質問は初歩的なのが多い。内容から推すにこれらは實際の問答であつたというよりも、問答体で書かれた教理綱要書と看做すべきであろう。中で注目すべきは、禅僧の生活に言及するものが多いことである。
- 第二十問に、禅師は木食すべきであるのに、世人と同じようなものを食べるのかといひ、第二十二問に、糞掃衣を着るべきなのに、世人と同じような衣裳を着るのかといひ、第二十三問、二十四問などには、人の誹謗や中傷を受けていることをいひ、第二十八問にも、その世俗的生活の様子を尋ねている。
- これらは、都市化した禅宗が墮落ないし妥協の様相を示しはじめていることを示唆するといふべきで、単に高踏的な教理問答に留まらず、僧侶の具体的な生活の側面を描いている点にも注目すべき価値があるように思う。
- つぎに引用經典について所見の一端を述べると、まず一般論として、經証を中心とした教理問答は、禅宗独立期、すなわち東山法

門の時代の特徴であるといえるのだが、その教学重視の姿勢は北宗においても継続される。それを脱却するのは馬祖道一の時代もしくはそれ以降である。従って、詳しい考証は後に譲るが本論もその禅宗の教理形成時代という範囲に属するものである。

引用経典はかなり偏っていて、多くは従来の禅宗の教理問答におけるそれと共通する。引用の仕方は原典を正確に引くものと、そうでないものが混在する。経名も場所によってまちまちである。これらの現象は『諸経要抄』[T.85,1192ff.]の如き經典要文集、所謂種本を利用したり、他の典籍から孫引きをした結果と思われる。渉典はなお不十分であるが、この点については今後、電子化テキストの充実によって飛躍的に改善されるであろう。それ故、拙稿はあくまで試論の域を出ない。

なお、注目すべきは、『中論』『十二門論』など、従来禅文献には余り例を見ない三論系の原典が出現しているのが知られた。これが本論の特徴の一角をなすのか、従来の渉典の方法に欠陥があつたのか、それは今後の課題としなければならないが、時代の宗派横断的性格や相互の相関関係を知る上で興味ある結果である。

出現する主な術語としては、「安心」・「看心」・「凝心」・「絶思離想」・「覚観」・「戒行」・「有心無心」などをあげる事ができる。これらは北宗系に特徴的な用語と考えてよいが、質問事項およびそれに対する解答の内容は比較的初歩的なものであるから、そこからこのテキストの位置付けを知ることができよう。

以上、考察はなお不十分であるが、この新出資料に対する一応の見通しはつけ得たと思う。今後、初期禅宗文献との照合を行ないつつ、さらに広く各宗にわたる文献を渉獵してシナ的な宗派の成立の様相を総合的に調査する、そのための一石としておきたい。

三、校訂本文(2)

(一)問、禪有幾種法門。

答曰、禪有无量法門。若聖理歸真、惟存大道。故法花經云、唯有一乘法、餘二即非真。

(二)問、禪師、若為坐。

答、端身直住、斂手對心、累脚重安、開眼合口、名之為坐。故維摩經曰、一坐十小劫、謂如一食頃。

(三)問、禪師、若為方便安心。

答、前念後念、凝寂虛平。非空非有、非色非名、定住凝心、更无畢(異)想。故經云、念念相統、即得悟道。

(四)問、禪師、若為看心、心何所緣。

答曰、定心凝寂、无滅无生、非黑非白、非暗非明、非長非短、非住非行、无言无說、皎絕際停。故法花經云、如諸仏所說真実微妙法。

於此无緣法、云何有緣。

(五)問、禪師既无所緣、合大乘意、会應方便旨歸之處。

答、悟心坦蕩、无有旨歸。接引禪門、定由念起。念逐心成、去思離想、勲行不住。非妙非闇非冥清虛水日(杳)絕、迴悟无生。故維

摩經云、三轉法輪於大千、其輪本來常清淨。天人得道此為證、三寶於是現世間。

(六)問、禪師若為澄(證)得清淨。

答、坦然平正、絕想離思、非意所圓(凶)、非心可惻(測)。故法花經云、諸法從本來、常自寂滅相、佛子行道以(已)、來世得作佛。

(七)問、禪定(師)既絕(思)離想、若為行道。

答、冥寂无心、名為行道。故經云、言若有所受法、墮於断常。知當(當知)所受法、亦常亦无常。

(八)問、禪師、有心即應可進道、若无心云何(得)知。

答、身心直住、垢静(淨)空閑、所已(以)得知。故維摩經云、過去心不可得、未來心不可得、現在心不可得。故引此證。

(九)問、禪師、若為喚作禪。

答、故攝存心、无諸放逸、六根清淨、動轉无虧。法花經云、安禪合掌、說千萬偈。

(十)問、禪師、何名為空。

答、冥真(意)絕思、不見身相、清虛直住、皎絕網覆、名為空。故經云、入大寂定、名大涅槃。

(十一)問、禪師、何名入禪。

答、斂容安坐、心无散動、善惡都捨、不染暄塵。世見似痴、合聖教。故法花經云、十方國土中、唯一乘佛法、无二亦无三。復有一行、是如來行。

(十二)問、禪師、若為坐禪。

答、身心常定、隨世散情、欣喜稍寬。却於疲厭。教清虛氣、不染塵荷(芥)。故法花經云、恒在靈鷲山、及餘諸住處、我淨土不毀、而衆見燒盡。

(十三)問、禪師、何為覺觀。

答、定住凝心、心有見聞、名之為覺。覺无取捨、稱之為觀。故經云、是空亦空、是淨亦淨。

(十四)問、禪師、定有所覺知不。

答、住定悟然、都无所覺。雖復去來、知見不遶心。故經云、色空愛色愛空。

(十五)問、然(禪)師既无所知、能受楚毒割截不。

答、不然。心堅固空、離六塵、非是木石。痴頑受鏹刺。故經云、內空、外空。內空者、六根空。外空者、六塵空。名為證。

(十六)問、禪師、諸法盡空、不墮空見耶。

答、空若有見、即有所依。若有所依、名為見着(著)。故經云、若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如來也。既如此、空有並非若脩道若(知)空有之性、即知道從空有而生、得意妄(忘)言、存有空而不失。故經云、空非空、故空、此空是空。有非有、故有、此有是空有名。名為證也。

(十八)問、禪師、禪定以後、更有思量不。

答、定心平坦、无有塵埃。定後一處不移、念想恒存不散。雖復去來、知見不染聲塵。一想湛然、无生无滅。故經云、王宮生而不生、雙樹滅而不滅。

(十八)問、禪師、四威儀中、何者得定。

答、大乘閑靜、開通无滯。四儀同寂、六度俱圓。一定清虛、更无前後。故經云、无前无後。

(十九)問、禪師、應樂山林閑寂、何意住在村坊城郭喧華之處、豈容得定。

答、小心編責、意好山林、非寂不安、閑无由定。大道寬弘、周流法界、示喧如寂、見靜不欣。雖處四流、心无愛染。故經云、衆生行世間、即見世間。菩薩行世間、不見世間相。

(二十)問、禪師、應喰松啖栢、何因還同世人相似。

答、理歸真寂、唯持心靜。何須喰松啖栢、服氣扶身、心涉六塵、无由合道。莫見形容相似。意實行得道之門、豈由自餓。故涅槃經云、菴羅之果、生熟誰知。

(二十一)問、禪師、戒行精研、去魔離障、何因饒病。

答、戒行脩身、必得來生果報。今身饒病、過去業緣。現愛除當來樂果。故經云、現身精進、多饒病痛、行者肥充。此是也。業果未圓、愚生異解。

(二十二)問、禪師、應著糞掃三衣、何意還同世人、衣裳相似。

答、道從心起、不由破納(衲)衣裳。行逐身生、何淪(論)碎衣成道。但存心念定、三毒不生。雖復衣合人心、心為聖主、如此之意、寧將心持身、終不將身持心。故經云、寧作心師、不師於心。

(二十三)問、禪師、能受罵辱楚毒、何意諧語面參異。

答、皮膚淺薄、隨色變異、心意幽深、无由可測。罵他得罪、受辱私欣。故經云、罵者是誰。打者是誰。

(二十四)問、禪師、德行高明、何者被人訶詰、作於誹謗、唯而无對。

答、行過三界、得被無邊。受詰弥欣、誹謗生憇。今雖受屈、往業弥長。莫見不聲、謂无所識。謗罵唯深、罪積須弥、業過阿鼻。故經云、作色而罵佛、其罪上(尚)輕。罵受持法花人、其罪過於彼。

(二十五)問、禪師、心應平等、彼意自違、念定不懃、到生偏耳。

答、禪師心恒端直、彼心不定、見有是非、謗毀前人、謂言阿曲。莫見慘色精神、教於无識。故經云、僂言及軟語、皆歸第一義。

(二十六)問、禪師、性行柔和、言語互下、何因高強精神、雄猛用意。

答、出言契理、實是合心(能)受。含靈性行不等。柔随和教、強逐剛誹。禪師心意坦然、身随世網、莫言雄列(烈)、即道心非時見溫柔、便言證理。是故涅槃經云、應久住處、不知大喻。菩薩方知持戒破戒。

(二十七)問、曰(日)課處測應得坐、何意要在房舍禪床始行法教。

答、自心求道、隨處得安。欲教有緣、必依房舍。鈍根无智、必須盡力催持。上行之人、通半偈而悟道。故菩薩經云、有一比丘、乞好房舍、始可脩道。佛即喚來、与共同房宿、當夜得道、成羅漢果。

(二十八)問、意會无生、心遊淨境。何因不出空入有、還住世間、見於善惡。

答、雖合无生名、意遊振(震)且。此土煩鬧喧遠者多、若不随世化、无由入理。身逐凡情、心遊出世。雖復現身、隱顯身是。夫心入至道、冥寂幽微、非是淺情之能測。故心王經云、凡身僂重、不能遠到他方。

(二十九)問、脩道應須勤苦節身、廣學多聞、何意端然直坐、矇矇无所思量。

答、云(心)存波若、淡泊(泊)清虛。雖復身力不懃、心功竭盡。廣學知見、都无成益。嘿念思禪、即是出道之梯蹬。故經云、五百羅漢習學盡世之經書、不能廻心反(返)照。

(三十)問、佛示定心悲嘆始憲門、心意坦然。何意還有經論、乍惡乍好、道是說非。

答、得意妄(忘)言、亦无好惡是非。言二毒未除、小智无知、身心俱闇、或生卑賤。習氣未除、惡業緣牽、還歸舊道。利根宿貴、心遊

曠遠、識達苦空、躰解真如、合无生理。故經云、羅睺是佛之子、嬌慢陵天。如来一乘、柔和更无違犯、名為羅睺蜜(密)行。

四、本文の訓注

(一)問う、禪は幾種の法門か有る。

答えて曰く、禪は無量の法門有り。若し聖理(3)もて真に帰せば、(4)惟だ大道のみ存せり(5)。

故に『法花経』に云く、「唯だ一乘法のみ有り、余の二は即ち真に非ず」と。(6)

(二)問う、禪師、若為が坐せん。

答う、端身直住し(7)、手を斂めて心に対し、脚を累ね重ね安んじ、眼を開きて口を合す。之を名づけて坐と為す(8)。故に『維摩経』に曰く、「十小劫に一坐するも、一食頃の如しと謂うべし。」(9)

(三)問う、禪師、若為が方便して安心せん(10)。

答う、前念後念、凝寂(11)虚平なり。非空非有、非色非名なるに定住して心を凝らし(12)、更に異想無し(13)。故に経に云く、「念念相続せば、即ち悟道するを得る。」と(14)。

(四)問う、禪師、若為が看心(15)し、心は何にか縁ずるや。

答えて曰く、心を定めて凝寂、無滅無生、非黒非白、非暗非明、非長非短、非住非行、無言無説、際停を皎絶す。故に『法花経』に云く、「諸仏所説の真実微妙法の如し。此の无缘の法に、云何が縁有らん。」と(16)。

(五)問う、禪師、既に縁する所無ければ、(如何が)大乘の意に合し、応に方便もて旨帰の処に会すや。

答う、心の坦蕩(17)なるを悟らば、旨帰有る無し。禅門を接引するに、定は念に由りて起り、念は心を逐うて成る。思を去り想を離れ、勤行して不住。非妙非闇非冥(18)清虚杳絶し(19)、迴悟して無生なり(20)。故に『維摩経』に云く、「三たび法輪を大千に転じ、其の輪は本来常清浄なり。天人は得道し此れもつて証と為す、三宝は是に於いて世間に現ぜり。」と(21)。

(六)問う、禪師、若為が清淨を証得するや。

答う、坦然(22)として平正、想を絶し思を離る。意の囿る所に非ず、心の測る可きに非ず。故に『法華經』に云く、「諸法は本来より、常に自ら寂滅相なり、仏子は行道已、來世得作仏。」と(23)。

(七)問う、禪師、既に絶思離想(24)ならば、若為が行道せん。

答う、冥寂無心、名づけて行道と為す。故に經に云く、「若し所受の法有らば、断常に墮す。当に知るべし所受の法は、亦た常亦た無常なり。」(25)

(八)問う、禪師、有心ならば即ち応に道に進む可きも、若し無心ならば、云何が知るを得るや。(26)。

答う、身心直住すれば、垢と淨とは空閑なり。所以に知るを得る。(27)故に『維摩經』に云く、「過去心不可得、未來心不可得、現在心不可得。」と(28)。故に此の証を引く。

(九)問う、禪師、若為が喚びて禪と作す。

答う、故く心(29)を撰存し、諸の放逸無く、六根清淨にして、動轉して欠ける無し。(30)『法花經』に云く、「安禪合掌、千萬偈を説く」と(30)。

(十)問う、禪師、何ぞ名づけて空と為すや。

答う、意を冥し思を絶し、身相を見ず。清虚に直住し、網覆(31)を皎絶す。名づけて空となす。故に經云く、「大寂定に入るを、大涅槃と名づく。」と(32)。

(十一)問う、禪師、何ぞ名づけて入禪(33)となすや。

答う、容を斂めて安坐し、心は散動する無く、善悪は都て捨て、喧塵に染まらず。世は見て痴に似たりとするも、聖教に合す。(34)故に『法花經』に云く、「十方国土中、唯だ一乘法有り、無二また無三(35)。「復た一行有り、是れ如来行なり」(36)。

(十二)問う、禪師、若為が坐禪すや。

答う、身心を常に定めて、世に随いて情を散じ、欣喜して稍や寛に、疲厭を却して、氣を清虚ならしめ、塵芥に染まらず(37)。故に『法花經』に云う、「恒に靈鷲山及び余の諸住処に在り。我が浄土は毀たず、而して衆の焼尽するを見る」と(38)。

(十三)問う、禪師、何をか覺觀と為すや。

答う、定住凝心して、(39)心に見聞有り、之を名づけて覺と為す。覺して無取捨、之を稱して觀と為す(40)。故に經に云く、「是れ空亦た空、是れ淨亦た淨」と(41)。

(十四)問う、禪師、定は覺知する所有りや。

答う、定に住して悟然、都て覺する所無し。去来すと雖復も、知見は心を遶らず。故に經に云く、「色は空なり。色を愛し、空を愛す」と(42)。

(十五)問う、禪師、既に知る所無ければ、能く楚毒割截を受けるや(43)。

答う、然らず。心堅固にして空ならば、六塵を離る。是れ木石の痴頑にして鐫刺を受けるに非ず(44)。故に經に云く、「内空、外空」と(45)。内空は、六根空。外空は、六塵空なり。名づけて証と為す。

(十六)問う、禪師、諸法は尽く空とは、空見に墮せざるや。

答う、空にして若し見有らば、即ち所依有り。若し所依有らば、名づけて見著と為す。故に經に云く、「若し色を以て我を見、音声を以て我を求むれば、是の人は邪道を行ず。如来を見ること能わず」と(46)。既に此の如し。空有は並びに非なり。若し修道して空有の性を知らば、即ち知んぬ、道は空有より生ずるを。意を得て言を忘れば、(47)有空を存して而も失なわず。故に經に云く、「空は空に非ず、故に空なり。此の空も是れ空。有は有に非ず、故に有なり。此の有も是れ空にして名有り」と。名づけて証と為す也(48)。

(十七)問う、禪師、禪定以後に、更に思量すること有りや。

答う、定心平坦、塵埃有ること無し。定の後、一処にして移らず、念想は恒に存して散らず。去来すると雖復も、知見は声塵に染

まらず。一想湛然として、無生無滅なり。故に経に云う、「王宮に生じて生ぜず、双樹に滅して滅せず」と(49)。

(十八)問う、禪師、四威儀(50)の中、何者か定を得るや。

答う、大乘は閑静にして、開通無滞(51)四儀は同じく寂たり、六度は俱に円なり。一定清虚にして、更に前後無し。故に経に云く、「無前無後」と(52)。

(十九)問う、禪師、応に山林の閑寂を樂うべきなるに、何意か村坊城郭、喧華の処に住せず。豈に定を得る容けんや。

答う、小心の偏言(53)もて、意は山林を好み、寂に非ずんば安ならず、閑は定に由無しとするも、大道は寛弘として、法界に周流す(54)。喧を示して寂の如く、静を見て欣ばず。四流(55)に処すると雖も、心は愛染する無し。故に経に云く、「衆生は世間を行きて、即ち世間を見るも、菩薩は世間を行きて、世間の相を見ず」と(56)。

(二十)問う、禪師、応に松を喰し柏を啖うべし(57)。何に因りてか還た世人と相い似たるや。

答う、理は真寂に帰し、唯だ心の静なるを持すのみ。何ぞ松を喰し柏を啖い、氣を服し身を扶けるを須いん(58)。心は六塵に渉るも、道に合うに由無し。形容の相似するを見ること莫かれ。意は実に得道の門を行ず。豈に自ら餓えるに由るや。故に『涅槃経』云く、「庵羅の果、生か熟か誰か知る」と(59)。

(二十一)問う、禪師、戒行精研にして、魔を去り障を離るに、何に因りてか病饒きや。

答う、戒行じ身を修むれば、必ず来生の果報を得ん。今身の病饒きは、過去の業縁なり。現愛は当来する楽果を除く。故に経に云く、「現身に精進するも、病痛多饒くして、行者肥充す」と(60)。此は是れ也。業果未だ円かならざるに、愚は異解を生ず。

(二十二)問う、禪師、応に糞掃の三衣を著すべきに、何意によりてか還た世人と衣裳の相い似たるや。

答う、道は心より起り、破衲の衣裳に由らず。行は身を逐いて生ず。何ぞ論ぜん碎衣もて成道せんを。但だ存心(61)念定すれば、三毒生ぜず。復た衣の人心に合すと雖ども、心を聖主と為す。此の如きの意は、寧ろ心を將て身を持すも、終に身を將て心を持せず。故に経に云く、「寧ろ心の師と作りて、心を師とせず」と(62)。

(二十三)問う、禪師、能く罵辱と楚毒を受くるに、何意によりてか語を諧ぐも、面は参異すや(63)。

答う、皮膚は浅薄にして、色に随いて変異するも、心意は幽深にして、測る可きに由無し。他を罵れば罪を得るも、辱を受ければ私に欣ぶ。故に經に云く、「罵る者は是れ誰ぞ。打つ者は是れ誰ぞ」(64)と。

(二十四)問う、禪師、德行高明なるに、何すれぞ人に訶詰せらるや。誹謗を作すに、唯に對うる無きや。

答う、行は三界を過ぎ、被ぶこと無辺なるを得たり。詰を受ければ弥よ欣び、誹謗されて慙を生ず。今、屈を受くると雖も、住業は弥よ長し(65)。声にせざるを見て識る所無しと謂う莫れ。謗罵は唯だ深く、罪は須弥と積み、業は阿鼻を過ぐ。故に經に云く、「色を作して仏を罵るも、其の罪は尚を輕し。法花を受持する人を罵る、其の罪は彼を過ぐ」と(66)。

(二十五)問う、禪師、心は心に平等なるべきに、彼の意は自ら違えり。念定に勤めず、偏りを生ずるに到る耳なり。

答う、禪師の心は恒に端直なるも、彼の心は定まらず。是非有るを見、前人を謗毀す。謂いて阿曲と云う。惨色の精神(67)を見て、識無しと教うること莫れ。故に經に云く、「僂言及び軟語は、皆な第一義に歸す」と(68)。

(二十六)問う、禪師、性行は柔和にして、言語は互いに下るに、何に因りてか精神を高強にし、雄猛に意を用いるや。

答う、言を出すに理に契い、實に是れ心の能受するに合す(69)。含靈は性行等しからず。柔ならば教に随い、強ならば剛誹(70)を逐う。禪師は心意坦然として、身は世の網に随い、雄烈を言う莫し。即ち道心もて非時に溫柔を見るを、便ち証理と云う。是の故に『涅槃經』に云く、「応に住処を久しくして、大喻を知らず。菩薩は方に持戒と破戒を知る」と(71)。

(二十七)問う、日課の処(72)に即ち応に坐するを得る。何の意にてか房舎禅床に在るを要して、始めて法教(73)を行ずるや。

答う、自心もて道を求め、随処に安を得る。有縁を教えんとせば、必ず房舎に依る。鈍根は智無ければ、必ず須く力を尽して維持すべし。上行の人は、半偈を通じて道を悟る(74)。故に『菩薩經』に云く、「一比丘有り、好き房舎を乞い、始めて修道すべし。仏は即ち喚び来り、共同の房に宿す。当夜に得道し、羅漢果を成ず」と(75)。

(二十八)問う、意は無生に会し、心は淨境に遊ぶ。何に因りてか空を出ずして有に入り、還た世間に住し、善悪を見るや。

答う、無生の名に合すと雖も、意は震旦に遊ぶ。此の土は煩鬧にして喧遠の者多し。若し世化に随わずば、理に入るに由無し。身は凡情を逐い、心は出世に遊ぶ。身を現すと雖復も、隠顕の身是なり(76)。夫れ心は至道に入り、冥寂幽微なり。是れ浅情の能く測るに非ず。故に『心王経』に云く、「凡身は鈍重にして、遠く他方に到る能わず」と(77)。

(二十九)問う、修道は応に須らく勤苦節身し、広く多聞を学すべきに、何の意にてか端然として直坐し、矇矇として思量する所無きや(78)。

答う、心は波若に存し、淡泊にして清虚。身力勤めずと雖復も、心功は竭尽せり(79)。広学知見も、都て益を成す無し。嘿念として禅を思ふ。即ち是れ出道の梯躋なり。故に経に云く、「五百羅漢は尽世に経書を習学するも、回心返照すること能わず」と(80)。

(三十)問う、仏は定心悲嘆始意門(81)を示され、心意坦然たり。何の意にてか還つて経論有りて、乍ち悪み乍ち好み、是と道い非を説くや。

答う、意を得て言を忘る。亦た好悪と是非の言無し。二毒(82)は未だ除かず、小智もて知る無し。身心は俱に闇く、或て卑賤を生ず。習気も未だ除かず、悪業の縁を牽き、還た旧道に帰す。利根は貴を宿し、心は眩遠に遊ぶ。識は苦空に達し、真如を体解し、合に理を生ずる無し。故に経に云く、「羅睺は是れ仏の子、嬌慢は天を陵ぐ。如来は一乗、柔和にして更に違犯する無し。名づけて羅睺の密行と為す。」(83)

註

- (一)方氏はこれらは北宗義福(658-756)の系譜に属する綱要書であるとするが、特に理由は明示されない。「蔵外 1 p.7」
- (二)テキスト論については「蔵外 1 p.45」の「題解」参照のこと。段落番号及び句読点は便宜上付したものの。また、改行も原文には従っていない。校訂にあたってはなるべく原文に忠実であることを心掛け、変更したい文字は○内に記した。◇は欠字として補なったものである。読み下しはとりあえず私解に従っている。

ところ。

⑨「一食を喫する間の意。短い時間をいう。『維摩經』に該当箇所なし。『法華經』「時會聽者亦坐一處。六十小劫身心不動。聽仏所說謂如食頃。」[T. 9, 4a] 参照。『景德伝灯録』卷二四「楚助禪師章に、「知了、經一小劫如一食頃。不知道理、便見茫然、還知麼。」とある。

⑩「妄尽還源觀」には、「問、止觀兩門既為宗要。凡夫初学未解安心。謂示迷徒令帰正路。答、依起信論云。若修止者。住於靜処端坐正意。不依氣息。不依形色。不依於空。不依地水火風。乃至不依見聞覺知。一切諸想隨念皆除。亦遣除想。以一切法本来無想。念念不生。念念不滅。亦不随心外念境界。然後以心除心。心若馳散即当撰来令帰正念。」[T. 45, 639c]と、「無念無想によつて正念に帰すという。

『一入四行論』は、その全体を「此は大乗安心之法」と位置付ける他、雜録部には、「又問、教弟子安心。答、將汝心来。与汝安。」という。「柳田達摩 p. 25, 217」『楞伽師資記』には「擬作仏者。先学安心。心未安時。善尚非善。何況其惡。心得安靜時。善惡俱無依。」[T. 85, 1284a]と、「有求大乘者。若不先学安心。定知誤矣。」[1284b]とある。①とく、安心に最大の価値を置く。また、「其信禪師。再啟禪門。宇内流布。有菩薩戒法一本。及制入道安心要方便法門。」[1286c]とく、「禪源諸註集都序」に「達摩以壁觀教人安心、外止諸緣、内心無喘、心如牆壁。」[T. 48, 403c]とく、「安心は達摩以来の實踐的課題であつたが、『絶觀論』に、「云何安心。答曰、汝不須立心。」[絶觀論 p. 87]とある。②とく、後には表立つた議論としては影を潜める。

⑪「きわめて静かな様子。『晋書・光武紀』「簡皇凝寂、不貽伊害。」等の用例もあるが、もつぱら北宗独自の用語。ひとつの理想的境地を指す。『宝藏論』「迷之者則歴劫而浪修。悟之者則当体而凝寂。」[T. 45, 145c]『最上乘論』「此識滅已。其心即虚。凝寂淡泊。皎潔泰然。」[T. 48, 379a]

⑫「荷沢神会(684-758)の『神会録』に、「凝心入定、住心看淨、起心外照、攝心内証」(ベリオオ三四八八)。「神会語録 p. 175」と、北宗を総括する。

⑬「原文「畢」のまま「更に想の畢る無し」と読むと、文意が逆転して定住凝心が否定概念となつてしまう。意によつてあらためた。

⑭「該当する經典は未詳。『楞伽師資記』に、「欲入一行三昧。応処空閑。捨諸乱意。不取相貌。繫心一仏。専称名字。随仏方便所。端身正向。能於一仏。念念相続。即是念中能見過去未來現在諸仏。何以故。念一仏功德無量無辺。亦与無量諸仏功德無二。不思議仏法等分別。皆乘一如。成最正覚。」[T. 85, 1286c-87a]これは『宝積經』の転用であるから、[T. 11, 655b]あるいはその取意か。

また、『円覚經』にも、念念相続は煩惱と等置されるが、そのまま円覚を弁ずるといふ。「善男子、一切世界始終生滅前後有無。聚散起止、念念相続、循環往復、種種取捨、皆是輪迴。未出輪迴、而弁円覚。」[T. 17, 915c]。ただし『六祖壇經』では「若前念、今念、後念。念念相続不斷。名為繫

縛。』[T.48.33a]と「否定概念である。

⑮北宗の立場を明確にする用語。上に見た『楞伽師資記』の他、『大乘無生方便門』に、「一切相総不得取。所以金剛經云、凡所有相皆是虛妄。看心若淨、名淨心地。』[宇井禪宗史 p.450]と「達摩觀心論』に、「空、心門者。謂看心、轉追覺心空寂。」といい、『方便論』に、「看心若淨名淨心地。莫卷縮身心展身心。』[T.85.1273c]等という。また、天台では、『觀心論』に、「一家門徒隨逐積年。看心稍久遠。遂不知如此研窮問心。是以不染內法。著外文字。』[T.46.586a]という。これは北宗批判と受け取っていいだろう。『頓悟大乘正理決』にも「掘金剛經及諸大乘經皆云。離一切妄想習氣。則名諸仏。所以令看心。』[正理決 f.129a]等という。

その評価は、『禪源諸詮集都序』に、「故北宗看心是失真旨。心若可看、即是境界。故此云非心境界。』[T.48.405a]等というに尽きる。即ち『六祖壇經』では、「看心看淨。却是障道因緣。今記汝是此法門中。何名座禪（坐禪）。此法門中一切無礙。外於一切境界上念不去為座。見本姓不乱為禪。』[T.48.339a]と「看心もそれに対応する坐禪の実修も全て否定されている。（参照…又有人教坐。看心觀靜。不動不起。從此置功。』[33a]

⑯該当箇所無し。原文は『中論』である。即ち、「諸仏の説く所の真実微妙法の如し。此の無縁法に於いて云何が縁縁有らん。』[T.30.3b]というのがそれ。恐らく孫引きの途次、原典を誤ったものと思われる。

⑰『論語』に、「子曰、「君子坦蕩蕩。小人長戚戚。」とあり、『宗鏡録』に、「応以忍辱坦蕩自心。応以智証潔白自心。』[T.48.603c]と「う。

⑱『大智度論』に「身放大光明。遍照十方。破諸闇闇。心出智慧光明。破衆生無明闇冥。』[T.25.219b]等とあり、闇冥をセツトと考えると、対句が不足している如くである。例えば『仏頂經』に、「亦復如是本是妙明。無上菩提淨円真心。』[T.19.112b]等とあるから、対句は「妙明」のことか。⑲原文には「水日」とするも、方氏の案に従って、「沓」とする。

⑳「非妙非暗」は「非明非暗」か。次の句も対比が悪い。「水日絶」は不詳。

㉑「三転法輪於大千。其輪本来常清淨。天人得道此為証。三宝於是現世間。』[T.14.537c]

㉒『法華經』其地琉璃坦然平正。閻浮檀金以界八道宝樹行列。』[T.9.45b]

㉓『法華經』[T.9.8b]。「以」の字は經文により「已」に正す。

㉔先出の「絶想離思」、「去思離想」に同じ。無念に集約されていく概念。『楞伽經』に「我說此句顯示離想、即說離一切想。』[T.16.493c]。『歷代

法宝記』和上得法已、一向絶思断慮、事相並除。」[T.51.186a]。

〔25〕『中論』の言葉。「若有所受法、即随於断常。当知所受法、為常為無常。」[T.30.28c]。引用冒頭にある「言」の字は衍字。

〔26〕肇論、答劉遺民書にいう、「至理虚玄。擬心已差。況乃有言。」[T.45.157a]。『趙州録』にも次のようにいい、無心と修行意志の問題は永く禅宗史上の課題となった。「師問南泉。如何是道。泉云。平常心是道。師云。還可趣向不。泉云。擬即乖。師云。不擬争知是道。泉云。道不属知不知。知是妄覺。不知是无記。若真達不疑之道。猶如太虚廓然蕩豁。豈可強是非也。」[zz.118.306b]

〔27〕『大乘無生方便門』にいう、「又身心俱離念。即是円満菩提。」[T.85.1275b]。

〔28〕『金剛經』の言葉。[T.8.751b]

〔29〕『大乘無生方便門』にいう、「不見六根相。清淨無有相。常不間断。即是仏。」[T.85.1273c]。

〔30〕『法華經』安禅合掌以千万偈、讚諸法王。」[T.9.3a]

〔31〕重々無尽の縁起の連鎖の譬喩であるインドラ網(天網)に覆われたこの現象世界のこと。『華嚴經』にいう、「無量光明。一切妙宝。皆在其内。

宝網覆上。十三大千世界。」[T.9.571c]。

〔32〕『涅槃經』我於此間娑羅双樹入大寂定。大寂定者名大涅槃。」[T.12.790b]

〔33〕『大智度論』卷六にいう、「撰心入禅時。以覺觀為惱。是故除覺觀。得入一識处。内心清淨故。定生得喜樂。得入此二禅。喜勇心大悦。」[T.25.185c]。『禅門口訣』に「進止有次第。龜細不相違。譬如善調馬。欲去如欲住。常能謹慎此。安身心入禅。」[T.46.581a]

〔34〕景德伝灯録卷三〇、「南嶽懶瓚和尚歌にいう、「飢来喫飯。困来即眠。愚人笑我。智乃知焉。不是癡鈍。本体如然。要去即去。要住即住。」

〔35〕『法華經』十方仏土中、唯一乘法。無二亦無三、除仏方便説。」[T.9.8a]。先の引用と同一個所。

〔36〕『涅槃經』卷一一 [T.12.673b] の言葉。

〔37〕『楞伽師資記』道信章に「初学坐禅看心。独坐一处。先端身正坐。寛衣解帶。放身縦体。自按摩七八翻。令心腹中噓氣出尽。即滔然得性清虚恬淨。」[T.85.1289a]

〔38〕同右、「常在靈鷲山、及余諸住処。衆生見劫尽、大火所焼時。我此土安穩。」[T.9.43c]

〔39〕荷沢神会(684-758)の四句あり。「凝心入定、住心看淨、起心外照、攝心内証」。北宗の修証主義を批判したもの。ただし別に、「凝心取定、住心看

淨、起心外照、摂心内証、或有起心観心而取於空、云々」というから、必ずしも固定したものではなかった。

④〇 覚観については、『大智度論』卷一七に、「摂心内定。覚観。亦復如是。如是等種種因縁訶覚観。覚観滅。内清淨。繫心一处。無覺無観。定生喜樂。入二禪。」〔T.25,186b〕などという。

④一 出典不詳。『大智度論』〔393c〕に様々な経証を集める中に、「一切法空。是空亦空。非常非滅故。」なる言葉が見える。

④二 出典未詳

④三 『大智度論』、「問曰、菩薩身非木石。云何衆生来割截而不生異心。答曰、……有人言、菩薩深修般若波羅蜜、轉身得般若波羅蜜、果報空心故、了知空。割截身時、心亦不動。如外物不動、内亦如是。得般若果報故。於諸法中無所分別。」〔T.25,682a〕

④四 『大智度論』卷八八にいう、「身如木石、而能慈念割截者、是菩薩能生如是心故。割截劫奪内外法時、其心不動。是為菩薩希有法。」〔T.25,682a〕。なおこれは、『宛陵録』などに、「若無岐路心、一切取捨心、心如木石」〔T.48,385b〕という立場とは異なる如くである。

④五 『仁王般若経』、「一切法空。内空外空、内外空。」〔T.8,825a〕。『涅槃経』、「空者所謂内空外空内外空。」〔T.703c〕

④六 『金剛経』〔T.8,752a〕

④七 『小室六門』、「因筌求魚、得魚忘筌。因言求意、得意忘言。」〔T.48,369a〕『楞伽師資記』、「得意即亡言。一言亦不用。」〔T.85,1288c〕

④八 般若經典に頻出する論理形式で、例えば『金剛経』に、「一切法者、即非一切法。是故名一切法。」〔T.8,751b〕等というのに同じ。但し、原文と同一のものは見出し得ない。

④九 『大乘無生方便門』、「如来王宮生双樹滅。即是出現於世。」〔T.85,1277a〕

⑤〇 招慶真覚大師頌『示坐禅方便』、「四威儀内坐為先。澄瀟身心漸坦然。」〔景德伝灯録』卷二九〔T.51,608b〕〕

⑤一 『十一門論』、「門者開通無滯之称也。」〔T.30,159b〕

⑤二 『維摩経』〔T.14,543c〕。『華嚴経』〔T.9,662b〕

⑤三 原文は「編責」とする。意味不詳。「偏言」もしくは「貶責」などの意か。方氏は「偏仄」とする〔藏外 p.49〕。

⑤四 『信心銘』、「大道体寛、無易無難。」『楞伽師資記』、「大道本来広遍、円浄本有。」〔T.48,1284b〕

⑤五 煩惱の四つの流れ。例えば『瑜伽論』に、「云何暴流。所謂四流。欲流、有流、見流、無明流」〔T.30,376b〕などという。

- 〔56〕出典不詳。『宗鏡錄』にも、「故経偈云。凡人行世間。不知世間相。如来行世間。了世間相。』[T.48,795c]とじて引用される。
- 〔57〕『宋高僧伝』一四卷、光州道岸伝、「餐松餌栢駕鶴乘龍。道教也。』[T.50,793a]
- 〔58〕『華嚴経』「食果服氣而飲水 思惟正法不放逸。』[T.9,436a]
- 〔59〕『涅槃経』大正十二、六四一中。戒体が清浄であるかどうかの議論に関して出された譬喩。外見によっては正体は分からぬという弁明。
- 〔60〕出典不詳。
- 〔61〕『楞伽師資記』道信章にいう、「外雖亡相。内尚存心。』[T.85,1289b]。また『景德伝灯録』卷三「達摩章にいう、「諸聖悉存心。如来亦復爾。』[T.51,31a]
- 〔62〕『涅槃経』「願作心師。不師於心。』[T.12,778c,779a]。『法王経』「而作心師。不師於心。』[T.85,1386c]。浄覚『注般若波羅蜜多心経』には、「涅槃云、寧作心師、不師於心」とい、「寧」の字を持つから、これの孫引きと考えてよい。なお、方氏の指摘するように、新出の『心王菩薩説頭陀経』にも引かれる。〔蔵外1 p.272〕
- 〔63〕「参異」は未詳。あるいは後ろに出る「変異」の写誤か。ここでは表情が変化する意とする。
- 〔64〕『摩訶般若波羅蜜経』卷四、「菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時。応薩婆若心。不見呵者、罵者、打者、殺者。亦不見用是空能忍辱。』[T.8,246a]
- 〔65〕前段と同じく忍辱波羅蜜の実践をいう。『続高僧伝』南岳慧思章にいう、「乃顧徒属曰、大聖在世不免流言。況吾無德豈逃此責。責是宿作、時来須受。此私事也。』[T.50,563a]
- 〔66〕『法華経』にいう、「若有惡人以不善心。於一劫中現於仏前。常毀罵仏其罪尚輕。若人以一惡言。毀皆在家出家説誦法華經者。其罪甚重。』[T.9,31a]
- 〔67〕語義不詳。惨めな心の状態をいうか。
- 〔68〕『大涅槃経』北本「[T.12,485a]。南本「[728a]。『祖堂集』卷八欽山和尚章に、「道士問。僂言及細語。皆帰第一義。如何是第一義。』[祖堂集p.128]とあるが、(こ)で(こ)は否定概念である。
- 〔69〕原文は「貶受」と見えるが語義不詳。今、能受ととる。『景德伝灯録』卷四、無住章にいう、「師今從理解説、合心地法。実是真理不可思議。』[T.51,63a]
- 〔70〕語義不明。「剛」のつく適切な術語は見当たらず、一方、「誹」も「謗誹」くらいしか見当たらない。
- 〔71〕『涅槃経』卷二六、「共住久処。智慧觀察。然後得知持戒破戒。』[T.12,773b]
- 〔72〕原文は「問曰、課処・・・」と読めるが、「問曰」は異例。「課処」も意味を取り難い。故に「問、日課処・・・」ととる。

〔73〕説法教化、あるいは以法教化のこと。『法華経』卷五、「我常在此娑婆世界説法教化。」[T.9.49b]あるいは仏法そのものこと。『六祖壇経』、「如来入涅槃。法教流東土。共伝無住即我心無住。」[T.48.345b]

〔74〕涅槃経』卷一四にいう雪山童子のエピソードをさす。「爾時釈提桓因。．．．難当弁才次第其声清雅。宣過去仏所説半偈。諸行無常。是生滅法。説是半偈已。．．．是苦行者聞是半偈。心生歡喜。」[T.12.692a]

〔75〕出典未詳

〔76〕『安尺還源観』にいう、「処凡身而不滅。雖有隱顕之殊。而無差別之異。煩惱覆之則隠。智慧了之則顕。」[T.45.637b]

〔77〕『心王経』蔵外 1 p.314]

〔78〕『景德伝灯録』葉山惟儼章にいう、「師坐次。有僧問。兀兀地思量什麼。師曰。思量箇不思量底。曰。不思量底如何思量。師曰。非思量。」[T.51.273b]

〔79〕『龍居士詩』卷中にいう、「大海闊三千。巨深五六万。余持七尺軀。入裡飲一頓。当時枯竭尽。龍王自出現。」[zz.120.62a]

〔80〕出典未詳

〔81〕『達摩禪師論』にいう、「言定心門者、由常看守心故、於五欲境界、不乱不惑。由看心故、中不令乱。」[蔵外 1 p.35]

〔82〕あるいは二毒か。『六祖壇経』に次のようにいう。「真如自性是真仏。邪見二毒是魔王。」[T.48.362a]但し、二毒の用例もある。『大智度論』、「邪見多者著無。二毒多者著有。」[T.25.331a]などがそれである。

〔83〕『法華経』に、「羅睺羅密行。唯我能知之。現為我長子。以示諸衆生。」といる。[T.9.30a]